大討論会

学生

vs

篠原修

vs

内藤廣

報告書

企画情報

・企画名：大討論会

・開催日時：2008 年 4 月 20 日

・開催場所：東京大学工学部 1 号館 15 号教室

・講師・ゲスト：篠原修（政策研究大学院大学）、内藤廣（東京大学大学院）

・企画者：前田翔三、永山悟

・ 企画趣旨：

GS デザインユースが発足し、3 年目を迎える。ワークショップ、見学会、サロン、レターと、精力的に活動を行ってはいる。しかし、新陳代謝の早い若い団体であるが故に、根本としての「いったい何のために活動するのか」ということがぼやけ始めているのではないか。そういったことを背景として、コラボレーションとは何か、日本の都市に対して何ができるのか、といったことを改めて考えることをこの企画の目的とする。

その方法として、土木設計家・篠原修氏、建築家・内藤廣氏との討論という形を取ることにする。両氏は個人として現在の建設業界の最先端で活躍する存在であり、かつ、GSDy の親団体 GS デザイン会議の代表でもある。両氏に対し、土木・建築等の分野で学び、働く私たちの疑問、考えをどんどんぶつけるもよし、先行き不透明な GS 会議の実情、これからの方針について率直な意見を求めるもよし。期待するのは普段のシンポジウムのような、大人な落ち着いた意見ではなく、激しい、感情的な本音である。

この討論は、自分達に対して問いかけていることと同じである。問いかけることで、悩み、苦しみ、そして何か新しい光が見えてくるかもしれない。興味がある方なら、GSDy の会員に限らず、一般の方も是非とも議論に参加して頂きたい。議論を通して、学生・社会人が、GSDy が、次なるステップに進めるような討論会になればと思う。（永山悟）

・企画内容：

■

・まち、都市、景観のこと

・業界のこと

・社会、時代のこと

・GroundScape会議、篠原修、内藤廣のこと

■

一つ、主観の応酬となることを全く厭わない

理屈っぽいところだけでの議論や疑問では、「それに関しては僕はこういう風に考えている。」—「なるほど。」で終わってしまうのではないか。自分自身の体験や進路、業界—仕事に対する悩み、その周囲から沸き上がった個人史的な思いや悩み、疑問等々の方が実は本質的ではないか。言葉遊びで終わりたくない。論理なり理屈の中にも熱のこもった「体温のある論理」となることを期待したい。

一つ、議論が二時間の枠の中に収まらないことを全く厭わない

多くの人間が十人十色の経験と思考をもって集まるのである。議論するなかで最大公約数的な模範解答を導きだそうというようなことは望んではいない。容易に答えの出せないことを議論しようとしているのである。

また、時間的な制約の中で言いたいことを言い切れなかった、発言の機会がなかった、ということも十分起こりうるであろう。あるいは討論会後にいろいろと思考を巡らせたことを言ってみたい、というようなこともあるであろう。そのような場合は討論会で言えなかったこと、討論会のあとで思考したことを是非文章として寄せてほしい。討論会の議事録とあわせて何らかの冊子にするつもりである。

討論会での議論が二時間の枠から熱をもってスピンアウトし、連続性をもつことを期待したい。

一つ、用意されたテーマに沿わない議論が出ることを全く厭わない

用意されたテーマに必ずしもそぐわないような話題であっても、それが重要な問題である、本質的な問題である、あるいは単純に是非聞いてみたい、というようなことであれば是非声を発していただきたい。言葉が放たれ、共有された瞬間からなにかが生まれるかもしれない。

成果物

・感想［参加者］

山岸英輝（東京大学）：
勉強不足の自分には篠原、内藤両先生の話は大変興味深く、耳を傾けるだけでもためになったと思います。

栗山喬（九州工業大学）：
哲学的な話をもっとしてもよかったのでは？
自分の中での理想、哲学を持つということは自分の仕事、生活を豊かにできるかもしれない。いろんな人の生きていく上での哲学にもたくさん触れてみたかった。

春日井暁子（千葉大建築）：
内藤先生の「どうしても場所を捨てられなかった」というお話にとても共感を持ちました。人間は割り切れる人、割り切れない人の二つにわけられると。私は割り切れない人なのだと思います。

川田武尊（早稲田大学社会環境）：
色々話が聞けてよかった。

加藤慎也（日本大学）：
もっと学生の意見を聞いて参考にしたかった。

濱元優（東急不動産）：
元景観研なのでしょうがないかとは思いますが、正直ありふれた話題が多いと感じました。すいません。手を挙げていない自分がいうのはおかしな話ですが、質問が少ないですよね。改善策は思いつきませんが、人数が多かったのかな？
宮下真紀子（八千代エンジニヤリング）：
思っていることは何となく言いましたが。
得るものがあったかは微妙でした。受け取る力も発する力も足りなかった。ケンカにならなかったなあ、残念。
私たちはこの先ケンカし続けないと生きてゆけないので企画としては正しかったのだ

と思いますが、「敗北感」というのはGSDy自体が先生方に甘えてきたということの照明なのかもしれないですね。

工藤智也（日本大学）：
意味深く面白いと思った。

山崎亮：
自分が熱くなって自分が行動しないと行けないと思いました。
それを達成するために自分を磨いて沢山の人と議論していきたいと思います。

杉田貴之（東京大学建築）：
ディテールに偏りすぎていて、意味が分からない。主観なら主観でテーマとなる軸が欲しい。もっと強く的確に。メールでいただいた文章の自分の解釈との違いが大きいせいか会場全体の温度差を強く感じる。

高田彩実（東京大学建築）：
都市と建築というテーマで勉強していますが、自分たちの考えていること、教育体制、現実とに、すごくギャップがあると感じています。
議論の内容が時事問題に移りましたがとても切実な話題もあると思いました。先生方のいうように、組織は時代とともに変化していると思います。変化のタイムラグにどのように反応できるのかが大事だと痛感しました。土木・建築にとらわれることなく今後も考えていくことの重要性を感じました。
土木の先生だけではない方をお呼びしたらもっと議論が発展したのではないでしょうか。帰結しない議論のほうが面白かったのでは。

岡田裕次（早稲田大学社会環境）：
頑張って発言すればもっと盛り上がったのではないかと思った。

・企画者としての感想と反省

GSDy の企画としてはここ最近記憶にないような失敗に終わった感のある本討論会であるが、企画の趣旨としてはそうずれてはいなかったように思う。GSDy の存在意義に関わる様々な議論、それはずっと語り続けられていくべきものだと考える。

問題は会のやり方、方法論にあったということになろう。企画者の責任は大きい。会の後にでた様々な反省点を箇条書きとして纏めておく。今後反省が活かされていくことを期待したい。

・篠原、内藤両氏を同時に呼んだことが良くなかった。(話題がそれた)

・ああいったことを両代表と議論するならばお互いの距離の近いところ、たとえば「ゆい」のような場所でやるべきであった。

・15 号教室の形態が、討論会という主旨からすると適した場所ではなかった。

・討論のテーマをもっと絞っておく必要があった。

・参加者に期待しすぎた。

・社会人になると思いのほか発言しずらい。

・両氏が正論を言うため、議論にならない。

・そもそも討論というスタイルで良かったのかどうか。

・学生代表として 4 人くらいを討論者として出して討論し、他の人は最後に質問時間を求めるという形の方が発言者に責任感が生じ良かったのではないか。

・最初の何人かでもサクラ的な人間を用意して議論の流れを創るべきであった。

・両氏が思いのほか討論に乗っかろうとせず、“先生”に徹していた。学生側も“生徒”になってしまった。

・先生方の話が長く、毒気を抜かれてしまった。

・ピンとこない質問をする人が多かった。

・煽りすぎたために、普通のシンポジウムとしてみればまあ普通でも異常に盛り上がっていないかのような空気になってしまった。

GS
デザイン
ユース

企画運営について

・準備ー報告書作成までの日程

討論会直後に、もう一度ああいう機会を設けようと言う話があったが公務員試験などがあったためにそのまま流れてしまった。また、報告書作成までにも時間がかかってしまった。テンプレートも出来たので今後はスピーディに行っていきたい。

・会計報告

特になし。

・参加理由[参加者]

◇会場一階のトイレのビラを見て

◇聞きたいことがあったから

◇KL２で聞いた。なかなかない機会なので。

◇ポスターを見て。（三人）

◇都市に対して興味があったから。

◇友達に聞いて。（四人）

◇HP を見て。

◇メールで知った。（三人）

・今回は討論会担当ということで前田がその責にあたったが、会の基本的な運営方法については皆で建設的に議論をするということがなかった。こういった討論会であったのだからもう少しユースとしてチーム意識をもってやれなかったかという悔いが残る。一人で自己完結的に企画していくのではなく、時間はかかっても皆が会を作り上げていくという過程に参加することで、会の内容もそこに向かう熱も変わっていったのではないかと思う。

今回は都市河川プロジェクトのこともあり、人材と能力が分散してしまった感がある。大きな企画をするときはできれば２ー４人くらいのチームを組んだ方が良いと考える。